

ければひいてみることで、そこにはいつもとは違う訳語が見つかるはずである。また、ある分野の用語辞典も必要であるが、英和辞典はできるだけ大きいものを使うべきで、研究社の「新英和大辞典」を座右に備えることをお勧めする。よく学生が「先生、この単語は辞書に載ってません」と言ってくる。その中には確かに辞書には無いような特殊な専門用語もあるが、殆どの場合、それは自分の持っている中型の辞書には載っていなかったということで、大きな辞書を見れば載っていることが多い(ケシカラン!よく調べてから質問に来なさい)。ちなみに、私は中学生のときから40年近く基本的には件の研究社「新英和大辞典」を使用しているが、最近それを持つたびに手首が折れそうになってきたので、早く電子辞書化されないかと心待ちにしている。

さて、不幸で「皮肉な自己満足」にしては取り留めもなく書いてきたが、最後に一冊の本を推薦しておく。この他にも目から鱗が落ちるような内容が書かれた本も多々あるが、実用性と効果とを考えると、次の本を挙げることにする。湊 宏, R.L. Rich 著「化学英語 - 英語らしい表現とその使い方」東京化学同人 (2520 円)。この一冊であたの論文英語が変わる!?

外国語≠英語

新名 謙二

私はほぼ2年に1度の割合でヨーロッパスポーツマネジメント学会に出席しています。この学会は毎年1回開かれますが、開催国が毎回変わります。おかげで学会に出席するだけでヨーロッパ各地を訪れることができます。学会での公用語は英語ですが、多くの場合開催国の母国語も公用語とされます。例えばスペインで開催された時は英語とスペイン語が公用語となりました。このため、英語以外の多くの言語にも接することになります。限られた経験ではありますが、学会出席を通じて私が外国語について考えた(体験した)ことを書いてみたいと思います。

<外国語が得意な人々>

概してベネルクス3国では3カ国語以上を話す人の割合が高いようです。ベルギー人の友人は5カ国語をしゃべれると言っていました(英語、フランス語、オランダ語は実際に話しているのを見ました)。もっとも彼は非常に優秀なので、誰もがそんなにたくさんの言語を操れるとは限らないのではないのでしょうか。

北欧の人は母国語以外に英語も話すのが普通ようです。ノルウェーの人になぜかと尋ねたら、「貿易をしないと国が成り立たない。英語を話さないとビジネスができないから」という趣旨の答えでした。必要に迫られてということでしょうか。言語体系が英語と近いという利点もあるのかも知れません。北欧でも言語の系統が全く異なるフィンランド人には英語が苦手な人が多いようです。

<外国語が苦手な人々>

南欧には英語を苦手とする人がたくさんいるようです。国際学会に出てくるような人の中にさえ、英語がほとんど理解できない(もちろん話せない)人がいます。でもイタリア語、スペイン語、ポルトガル語のうちのどれか2カ国語以上をしゃべれる人はかなりいるようですので、外国語が苦手というのは失礼かも知れません。

実はイギリス人は外国語が苦手じゃないかと思えます(根拠はありませんが)。なぜなら、彼らが英語以外で話しているのをめったに見ないからです。多くの場合は英語以外の言語を母国語とする人たちが“わざわざ”英語を使って話しています。かくいう私もイギリス人と話をする時は日本語ではなく英語を使うことが圧倒的に多いです。

<同時通訳の限界>

例えば英語とフランス語が学会での公用語になっている場合、同時通訳のサービスがあって、英語の発言はフランス語に、フランス語の発言は英語に直してくれます。ところが他の言語から英語に直す通訳はかなり怪しいもので、発言の半分も翻訳されていない場合も頻繁にあります。特に発言者が早口でしゃべったりした場合など、通訳もお手上げという感じで、全く訳されないこともあります。困るのは自分の発表に対して英語以外の言語で質問されたときです。通訳がきちんとなされていればともかく(それでも自分できちんと英語を理解しないとイケませんが)、今ひとつ信頼がおけない場合など、勤に頼って返事をするよりありません。たいていは時間がなくなってセッション終了後に身振り手振りの会話でコミュニケーションをとることになります。

<日本人は英語が下手か?>

英語を母国語とする人々と比べると、日本人の英語は下手かも知れませんが、英語を母国語としない人々、例えばラテン系の言葉を話す人々やスラブ系の言葉を話す人々と比べると特別日本人が下手だとは思えません。何を言っているのかさっぱりわからない発表や、文法や綴り字に明らかな誤りのある文章を見かけることも珍しくありません。概してスペインやポルトガルの研究者は、英語ができないことに対して同情や理解を示してくれます。自分たちも苦勞しているからでしょうか。面白いのは(皮肉なのは)そのような人々と会話をする時に英語を使わなければならないことです。残念ながら私のスペイン語やポルトガル語の能力では挨拶程度の会話しかできませんので。

<フランス人の英語嫌いは本当か?>

「フランス人は英語が嫌いだから、Can you speak English?と尋ねてはいけない。Yes, I can. But I don't.と答えられてしまうから。」というような話を聞いたことがあります。事の実偽はともかく、英語が苦手な人は少なくないようです。INSEP(フランスの国立スポーツ科学センター)の研究者の中にも、英語が得意でない人が何人かいました。一般人に至っては推して知るべしではないでしょうか。

<外国人恐怖症?>

とある列車の中でのこと、ある外国人が次の駅で降りるために隣の席に座っていた年配の婦人にゆっくり話しかけました。「アノー、ツギノエキデオリマスガ、ソノトキニトオシテモラエマセンカ」。婦人はあわてて通路を挟んで座っている夫に助けを求めました。「ちょっと、お父さん、隣の外人さんが何か言っているよ。私は英語ができないから代わりに聞いてよ」。この会話は日本ではなく、スペインでマドリッドからバスク地方へ移動する列車の中で交わされたものです。外国人とは私のことで、カタカナ部分は一応スペイン語でこんなことを言ったつもりです(実際に何と言ったかはもう忘れてしまいました)。その後の婦人と夫との会話はかなりの部分私の推測ですが、きっとこんな内容だったと思います。英語ではなく日本語あるいは中国語だったかも知れませんが。

このような会話は日本やスペインの田舎ではありそうですが、イギリスの田舎ではありそうに思えません。「外国人はきっと自分の母国語をしゃべらないだろう」という思いこみが“外国人恐怖症”となってとっさの会話に現れるのではないのでしょうか。

ちなみにこの会話の後、何とかコミュニケーションがとれ、なんと手作りのお菓子をごちそうになりました。言葉というものがどんなに大きな力を持っているかを思い知らされました。

<私はバイリンガル?>

実は私にとっての第一外国語は日本語(標準語)です。

子供の頃は、テレビから聞こえてくる言葉は、日常の話言葉とは違う特別の言葉だと思っていました。本を音読したり、演劇のせりふを言ったりする時なども、日常語とは違う特別の言葉を使うのだと思っていました。高校2年生の時、初めて東京に旅行しましたが、街で人々がテレビの中と同じようにしゃべっているのを聞いて新鮮な感動を覚えました（さすがにその頃には、自分たちの言葉の方が違っているのだとわかっていました）。

私は鹿児島県の出身です。父も母も純粋な鹿児島人ですから、高校卒業まで自宅では鹿児島弁の世界で過ごしました。標準語を自由に使いこなすためには、頭で考えるときにも標準語を使って考えています。帰省したときには当然鹿児島弁でしゃべりますから、頭の中も鹿児島弁で考えることとなります。学生時代は鉄道を使って帰省していましたので、熊本を過ぎるあたりから、「そろそろかごっまべんにせんなあね」という具合に頭の中を切り替えていました。最近では飛行機で帰るのですが、なかなか頭の中を切り替えるのは難しいです。実家に着いてから1時間ぐらいはなんだか変な気分です。

「バイリンガルといわれる人たちもきっとそうなんだろうなあ」と勝手に納得している次第です。方言の場合には文字が同じですから二カ国語を使い分けることとは質が違うのかも知れませんが、ヨーロッパ系の言語はみんな同じ文字を使っていますし、もしかしたら標準語と鹿児島弁との違いはスペイン語とポルトガル語との違いよりも大きいかも知れません。鹿児島でも島嶼部の言葉はさらに違っていて、奄美大島出身の女性と結婚した高校時代の友人は、家庭での会話には標準語を使っています。日本人とフランス人が英語で会話をするようなものですね。

なんだかまとまりのない文章になってしまいましたが、いろいろな国の言葉を知ることはおもしろいと思います。外国に行ったとき、その国の言葉を多少なりとも知っているのとそうでないのでは、得られる感動に雲泥の差があるのではないのでしょうか。現在私はフランスで旅行を楽しむために（特にフランスの田舎を旅行したいので）、フランス語と日々格闘しているところです。

英語はたいへんだ

小川 昭二郎

私が始めて外国語の本に興味を持ったのは、中学生の時でした。同じクラスにM君という仲良しの友達にいたのですが、家にもよく遊びに行きました。彼のお父さんは外国航路の商船の船長で、家には珍しいものが沢山あったのです。私が特に気に入ったのは、“Popular Science”という子供向けの科学雑誌で、遊びに行ったときは必ず借りて帰りました。多分、M君のお父さんは、息子に科学に興味を持ってもらいたくて外国から取り寄せていたのだと思います。しかし、彼はほとんどこの雑誌に興味を示しませんでした。その代わり、赤の他人の私がこの本の影響を受けて科学の道に進むようになったのです。

宇宙、自然、機械などの写真や絵が載っていたのは覚えているのですが、書かれていた英語についてはあまり記憶がありません。つまり、この本を通して英語の勉強をしようなどとは全く考えず、ただ自然や科学技術の面白さを感じていたのだと思います。

高校生になってから、ますます理科が好きになっていったのですが、同時にまた、当時の貧しい日本を救うには科学技術しかないと感じていたようです。したがって、語学などというものは、生産には本来関係の無いもので一生懸命やるものではないなどという生意気な考えをしていたようです。

当然、英語の勉強に身が入らず、大学受験にも失敗してしまいました。浪人中は心を入れ替えて、苦手の英語の勉強に時間をかけることにしました。ただ単語を暗記していても面白くないので、好きな推理小説を英語で読むことに専念しました。この訓練は、現在、化学の専門書や文献を読むことに大いに役立っていると思います。つまり、なるべく辞書を使わずに1行ごとに、なるほど、なるほどと思いながら読んでいく楽しみは当時の勉強で身についたものだと思います。

私はもともと無口な少年で、人と話をするのが苦手で、まして、英語で話をするなどとは考えただけでも恐ろしかった。当然、会話の訓練は出来るだけ避けてきました。しかし、研究を仕事とするようになってから、外国に行つて国際学会で発表しなければならなくなってしまった。そこから私の地獄が始まったのです。

そのつらい話をここでする積りはありませんが、好きな科学の研究だけしていればよいというわけでは決してないということは、子供のころは考えもしなかった。君たちも、これからは、どのような職業につくことになっても、国際語である英語の読解力と会話力は必ず必要になります。中学生の時からしっかり勉強しなければなりません。大学生になってからでは遅いのです。

しかし、それ以前に、自分の考えを的確に相手に伝える訓練が必要です。外国では、ディベートの訓練を子供のうちからやっていると聞いています。人と言ひ争いをするこはいやなものですが、しかし、信念をもって自分の考えを相手に伝え、また、相手の言うことをしっかりと聞くことがディベートなのです。とくに、相手の言うことを聞いて理解するということが大事です。

わたしは、大学で授業をしています。学生から質問がないときはさびしいものです。全員が私の講義をすべて理解しているはずがないのです。それなのになぜ質問をしないのでしょうか。また、ゼミナール形式で学生に発表させ、それについて討論する授業があるのですが、そこでも、あまり質問や自分の考えをのべることをしない学生が多い。彼女たちは恐らく世の中に出てから苦労すると思います。私は時々中学校の授業を廊下から覗くことがあるのですが、活発に意見を言っている様子を目にして頼もしく思っています。また、自主研究などでは、自分たちで意見を出し合って進めていくということも聞いています。中学校時代から自分の意見を頭の中で組み立て、また、相手の話をしっかりと理解しようとする訓練がされていれば、外国語の会話もそれほどむずかしいものではないと思います。

私は大学の外でいくつかの委員会の委員長をしています。なるべく口数の少ない委員から意見を言ってもらおうように心がけています。討論が活発になれば委員会も楽しいものです。

外国語について書くようにということでしたが、話がそれてしまいました。英語を母国語としない日本人は国際的に不利だなどと言っている時代がもう来ています。帰国子女学級の子供たちと仲良くすることでもよいから、外国語を恐れない、むしろ楽しむようになってもらいたい。

しまった。大学生のために書く積りが中学生向けのお話を書いてしまった。もう後の祭り。ごめんなさい。

留学でわかる英語の力

藤原 葉子

オーストラリアの南端メルボルンで、娘と夫とともに2年間の留学生生活を過ごした。モナッシュ大学の附属病院に併設されたベーカー医学研究所は、心血管系疾患の基礎研究では有名なところで、博士を取得して娘を出産した後の